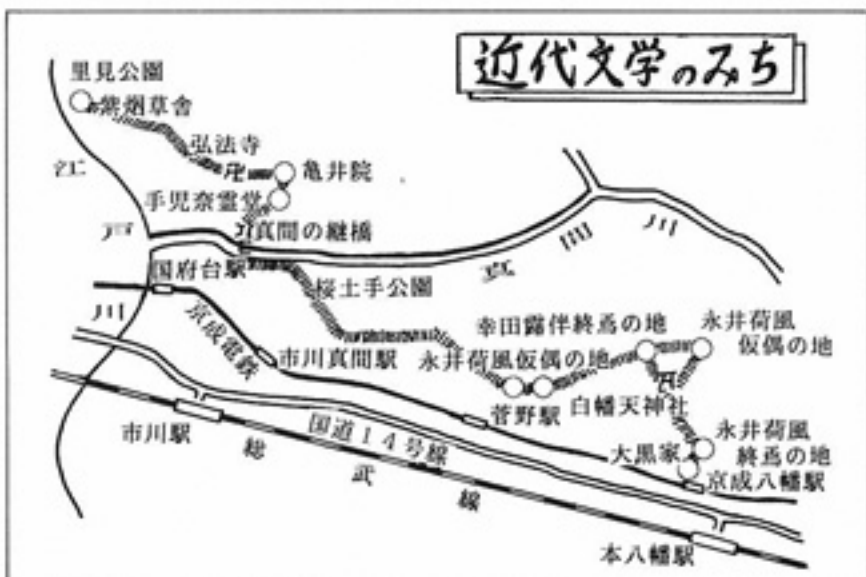


文学の散歩道

近代文学のみち



背広にチョウネクタイ、下駄ばきにコウモリガサ、買い物カゴの“荷風スタイル”（昭和22年10月）。



市川市教育委員会

市川と近代文学

市川市教育委員会が発行した「市川の文学」には、市川市に関する作家120余名が載せられています。その中の近代文学関係では、伊藤左千夫、夏目漱石、幸田露伴、正岡子規、田山花袋、与謝野晶子、永井荷風、北原白秋、谷崎潤一郎、吉井勇、山本有三、吉川英治、水原秋桜子、山本周五郎、三島由紀夫等、わが国近代文学の巨星をはじめ、90名にのぼる作家とその作品の一部が収録されています。

これら作家の中から、最も市川市に関係深い人物の跡を中心にたどったのが「近代文学の道」です。その人物とは北原白秋、幸田露伴、永井荷風の三名です。

北原白秋が葛飾の響きに心引かれ万葉の古跡を慕って、二度目の妻江口章子と真間の亀井院に居を求めたのは大正5年5月のことでした。

葛飾の真間の継橋夏近し 二人わたれりその継橋を
と大正10年に刊行した「葛飾閑吟集」で歌っています。その白秋夫妻が6月の末には江戸川の対岸、小岩村三谷に移りました。その借家が「紫煙草舎」です。この真間・三谷での生活は白秋にとって生涯での貧乏のどん底時代でした。

紫煙草舎は昭和44年、市川市が所有者から寄贈を受け、三谷の対岸に当たる里見公園内に復元しました。

幸田露伴が菅野に移り住んだのは、昭和21年1月のことです。菅野にきた頃の露伴は、歯はがくがくで白い髭を長くのばし、頭は回りに少し白髪を残してハゲており、眼は白内障のため本を読むことは諦めていました。耳も遠く足は立たず、肉はすっかり削げ落ち、人手を借りなければ上半身を起こすことすら出来ない状態でした。

こうした中で露伴は大正13年から始めた「芭蕉七部集評釈」の口述を続け、遂に22年3月これを完成させ、その年7月30日、80歳で世を去りました。当時近所の人ですら第一回文化勲章受章者、学士院会員、芸術院会員といった幸田露伴が住んでいたということは8月2日の露伴葬儀の新聞記事を読むまでは知らなかったといえます。

永井荷風は露伴とおなじ昭和21年1月に菅野に移り住みました。そして27年11月には「穏やかな詩情、高い文明批判と鋭い現実鑑賞の三面を備えた創作をなし、外国文学の移植に業績を上げた」ということで文化勲章を受章。市川では露伴に次ぐ文化勲章の受章者となりました。また29年には芸術院会員に選ばれています。

荷風はつねづね、自分は「市川が好き、市川を墳墓の地と決めた」と話していました。32年3月京成八幡駅に近い八幡3丁目に土地を買って家を建てましたが、2年後の34年4月29日、京成駅前の大黒家で一級酒1本とカツ丼を食べ、家に帰って日記に1行〜「四月廿九日、祭日、陰」と書き残したまま世を去りました。

北原白秋

明治18年1月25日福岡県生まれ、本名隆吉。明治37年上京早稲田大学英文科中退、その後与謝野鉄幹らの「明星」に参加、また高村光太郎、木下杢太郎らと「パンの会」を開いた。明治42年最初の詩集「邪宗門」を、44年詩集「思い出」を刊行した。



北原白秋
後進の指導に当たったが、昭和17年11月2日57歳で世を去った。

いづれも世評が高く評価され、詩壇を挙げての激賞を受け、名実共に我が国詩壇の第一人者となったが、松下俊子との道ならぬ恋に落ちて以後、作風も次第に変わり、独自の境地を打ち開いた。

歌集「雲母集」「雀の卵」詩集「水墨集」などを出し、また童話、民話にも新風をもたらした。

幸田露伴



幸田露伴

慶応3年7月23日東京に生まれる。本名成行、別号蝸牛庵。通信省電信修技学校を終え、電信技手として北海道に赴任したが、まもなく上京、文学を志して明治22年に「露田々」「風流伝」を発表して文壇に地位を確立した。次いで「一口剣」「五重塔」などによって、東洋的思想を基礎とする独自の作風を示し、尾崎紅葉と並ぶ大家と呼ばれた。

晩年中国、日本などの歴史、文学の研究に移り、以後「運命」などの史伝を始め、芭蕉俳句の研究などに業績を残した。昭和22年7月30日死去。娘文は晩年の露伴を作品「雑記・終焉・葬送の記・菅野の記」等の中で語っている。

永井荷風

明治12年12月3日東京小石川に生まれる。本名杜吉、別号断腸亭主人、金草山人など。東京外国語学校支那語科中退。20歳のころから広津柳浪に師事して小説を書き、傍ら福地桜痴の門下生として歌舞伎の作者、新聞社員などになり、父の不興を買って明治36年アメリカに留学、40年フランスに渡り、翌年帰国「あめりか物語」「ふらんす物語」を発表した。

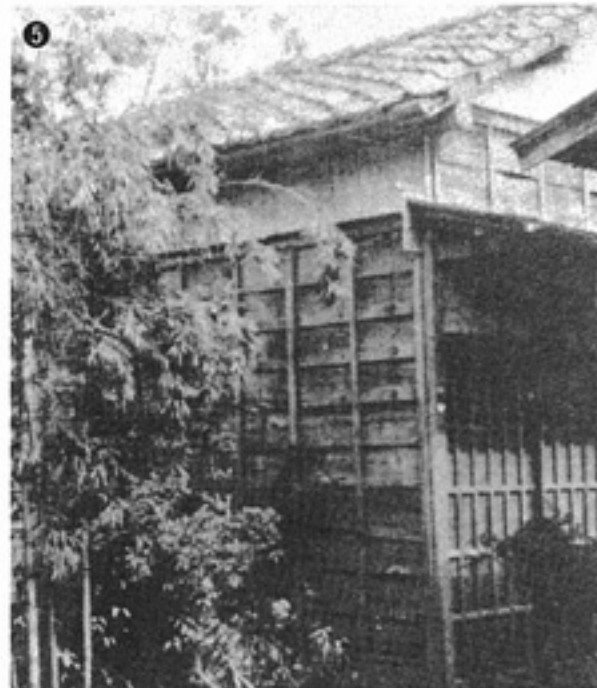


永井荷風
随筆と並んで日記「断腸亭日乗」は特に評価が高い。

明治43年慶応義塾大学文学部教授となり、「三田文学」を創刊、耽美派の旗頭として活躍。大正期に入って反時代的な姿勢が一層顕著になり、「腕くらべ」など花柳界を題材とした小説を書いた。昭和期には「墨東綺譚」があるが、小説・随筆と並んで日記「断腸亭日乗」は特に評価が高い。



①白秋が居たころの亀井院



⑤昭和22年7月30日、露伴はこの家で息を引きとった。菅野の蝸牛庵。

⑥白幡天神社は娘文(あや)をはじめ晩年の露伴を語る作家の作品に描かれている。

⑦菅野に買い求めた家の前に立つ荷風。



荷風は菅野の地を転々として八幡に落着いた。
 ①杵屋一家と共に最初に住んだ所
 ②フランス文学者小西方に移る
 ③新たに購入した家(写真⑦)
 ④八幡に新居を完成、終焉の所となる。



②小林清親が描いた継橋(部分)白秋夫妻もこの橋を渡った(大正5年秋に改修された)
 ③昭和44年、里見公園内に移築、復元された紫烟草舎(屋根は瓦に葺き変えられた)
 ④里見公園より小岩村三谷方面を望む(大正末期の写真)



⑧上から白秋・露伴・荷風の作品
 ⑨荷風の使用した机と文房具
 ⑩荷風最後の晩さん(大黒家にて)

